



研究活動と産学連携

伊藤 弘昌[†]

Research Activity and Industry-Academia Collaboration

Hiromasa ITO[†]

国立大学が法人化移行の準備段階で、大学の部局を含め全組織にミッションステートメントの整備が求められたことがありました。そのさなかの2003年3月に、東北大学総長をスタンフォード大学に案内する機会があり、その折面談した関係者に貴学のミッションステートメントは何かと尋ねました。その中には J. L. Hennessy 学長、R. L. Byer 教授 (vice provost) や、産学連携の責任者もいました。彼らはさて何だったかなと考えてから、いずれもが当然といった顔つきで「education」という同じ返事を返してよこしたことが深く印象に残りました。シリコンバレーを形作った大学のミッションには、驚くことに「教育」ということしかなかったのです。高度の研究に裏打ちされた教育の重要さに改めて再認識をさせられ、産業展開はそのような大学の必然的な出口であり、あえてミッションステートメントに文言を加える必要がないというのでしょうか。

私は1975年から1年間、シリコンバレーがエレクトロニクスで活発な活動をし、レーザー企業も新たに動き始めた時期にスタンフォード大学のバイヤー教授のもとに滞在していました。この時ちょうど教授がQuanta Ray社を立ち上げてわずか半年後で、いわゆるガレージベンチャーオペレーションを目の当たりに見ながら過ごしました。スペクトラフィジックスをはじめとするレーザーや光学、エレクトロニクスのベンチャーや、社長を含めわずか4人のQuanta Ray社を見ながら、時間を置けば同様に日本でも規模は違っても、このような動きは必ずでてくるのではと思って帰ってきました。当時は今では当たり前ですが日本にないいろいろなものが続々上陸してきていた時で、DIY店が全国的に広まったのも帰国直後でした。しかし読みはずれ、一向に動きは鈍く時間が過ぎていきました。そんなことからその後、東北大学未来科学技術研究センター(通称NICHE)やJSTの地域展開産学事業のイノベーションプラザなどの産学連携事業にたずさわることになり、推進の一翼を担ってきました。

大学における研究環境の変化は大きく、また産業界における特に新たな課題への取り組みは大きく変化し、社会の大学への要求は変わってきました。資源を持たない日本が、科学技術立国としての将来への活動なくして明日はありません。研究者の好奇心に基づくボトムアップ的研究と、出口を意識したトップダウン的取り組みはともに重要なことは言を待ちませんが、しかし近年、後者に対しての成果が大きく求められすぎているように感じます。大学や公的研究機関にいる研究者には、私は是非この2つの研究をバランスよく持続して行ってほしいと強く思っています。好奇心に基づく学術に根差した前例のない研究には、継続が不可欠です。成果が出るには長い時間がかかりますが、必ず成果に繋がると信じています。焦らずにはじめはアングラの研究かもしれませんが、目指す研究成果が実現する新たな世界を夢見ながらそれを形にしてゆくことが、結果としてわが国のノーベル賞の種を育てることにもつながると信じています。一般には夢は実現する可能性が低いものですが、研究者の夢は違うと思います。自ら描く夢を、自らの努力・能力で実現できるという特権を研究者は許されています。あまりに近視眼的な出口志向では、大きな夢は描けません。次の世代へと繋がる夢も語れるような研究が活発化するよう、あまり大型ではない幅広い研究援助も必要なのではないでしょうか。一方で大学にいる研究者には、最大のミッションは「教育」であることをくれぐれも忘れずに理解し、夢の実現に向けて元気に活動してほしいと思います。

[†] 東北大学名誉教授、理研客員主管研究員(〒980-0845 仙台市青葉区荒巻青葉519-1399)、JST産学共創「テラヘルツ波」PO

[†] Professor Emeritus of Tohoku University, Senior Researcher of RIKEN (519-1399 Aramaki Aoba, Aoba-ku, Sendai 980-0845)